

### 「カリタスの家の良いサマリア人物語」

私はカテドラル構内の「東京カリタスの家」に勤めて四年になります。東京メトロ有楽町線の江戸川橋駅を降りて公園の入口を通ってきます。公園の入口にはホームレス状態の方が何人かいます。朝晩いつも気になりながら何も



しない自分がいます。また別な場所で活動しているからとか、一度関わっても途中でやめたら失礼だからとか自分に言い訳をしている自分もいます。ルカ福音書 10 章「善いサマリア人」 31・32 節の半殺しにあった人を見て道の向こう側を通った祭司とレビ人を思い出しました。

その公園には特に目が不自由で足が痛そうな老人がいました。とても具合がわるそうな時に東京カリタスの家のスタッフが気づき、私も呼ばれて救急車を呼ぼうと説得しましたが、以前に救急車で嫌な思い出があったようでなんとしても行きません。挙句あげくの果てには棒で追っかけまわされたり、そんな中で彼の頭の髪をバリカンで刈ったり、お話ししたりするスタッフがいて、しばらく交流が続きました。病気がさらに悪化して数ヶ月後やはり救急車で運ばれ入院することになりました。入院後は別なボランティアがお見舞いに行くようになりましたが、入院中とても頑固で注射は嫌がり、騒いで、言葉も乱暴でボランティアに向かって「善人ずらすな、このガキが」と言ったり、手術のときには「触るな！何する！」「俺が手術やって良いつて言ったか？」と怒鳴り散らす始末でした。

今年の一月のある日お見舞いに行くと「すみません、ねえさん悪いですが痒かゆいので背中搔かいてください。」「悪いですが眠いので寝かせてください。」「ジュースを飲ませてください。」こちらが帰りますと言うと「居てくださいよー」そのうち「ねえさんもう寝かせてください。」じゃーゆっくり休んでねと言って帰りました。その翌日彼は亡くなりました。彼の葬儀は東京カリタスの家のスタッフ・ボランティア3人と以前彼がお世話になった保健士さんが休暇をとって来てくださり、4人でお花を添えて見送りました。その中で亡くなる前日に突然、不思議に敬語、丁寧言葉になったのはどうしてという話題になり、きっと皆に感謝しての言葉かもしれない、きっとそうだという結論に達しました。彼との交流を通して私たちは多くのものをいただいたように思いました。（岩田鐵夫）